

● 最優秀賞

インターネットを情報メディアとして活用し、 世界を広げる

愛知県小牧市立篠岡小学校 ^{にわ}丹羽 ^{あつし}敦

1 はじめに

「情報は発信するところ集まる。」と語った方がある。教育活動の一環としてのホームページによる情報発信は、ネットワーク上でさまざまな人々との出会いをもたらし、電子メールを中心とした交流活動を活発にする。そのことは、従来教室の中に閉じこもりがちだった教育実践がその壁をのり越えて、世界に広がっていくことになる。

インターネットを情報メディアとして活用することによって、子どもたちの学びの質は、比較にならないほど豊かになるのではないかと考えた。そのために、積極的にホームページによる情報発信と電子メールによる交流活動に取り組み、数多くの出会いを大切にしていこうことにした。これらの取り組みは、教室の中だけではできない体験を、子どもたちにもたらずであらう。それは、学びの質を豊かにし、高めることになる。

2 ホームページによる情報発信と 学習の取り組み

(1) 篠岡小学校5年1組ホームページが めざしたもの

ホームページでは何をめざそうとしたのか。まず第一に、子どもたちの生き生きとした姿を知らせたい気持ちがあった。また、子どもたちの書いた作文やレポートなどの学習の発表の場にもしたい。それがホームページでの情報発信の始まりである。

まず、学級日記を掲載し、学級の様子を公開することにした。さらに行事や学習内容など、テーマを決めて内容を構成し、学習交流の場にもしたかった。ホームページ閲覧対象を父母だけではなく、地域の人々や他の学校の小学生などにも広げ、大きな視野に立って考えることにした。

ホームページは学級日記からスタートして、日本語入力の練習を兼ねた自己紹介、福祉教室や自然教室といった行事のレポート、国語のリレー物語など、しだいに内容を広げていった。どのページにも共通しているのは、子どもたちの視点を失わないようにしたことだ。子どもたちの書いた文章はもちろんのこと、担任が構成する場合も、その点を重視した。

(2) メールがやってきた

検索サーバーに登録すると、すぐに1通の電子メールがやってきた。篠岡小学校と同じ桃花台ニュータウンに住む方からであった。

今日あなたたちのホームページを初めて見つけました。

私は桃ヶ丘1丁目に住んでいます。ちなみに私もホームページをインターネット上に載せています。(中略)

また楽しい記事が掲載されてないか立ち寄ることにします。では。

子どもたちに紹介すると、大喜び。「本当にみんなが見てくれるんだ。」「また立ち寄って書いてあるよ。」子どもたちは、一日中、

この話題で持ちきりだった。

次にやってきたメールは、神奈川県に住む篠丘小学校の卒業生からだった。メールは小学校時代の思い出や子どもたちへの励ましの言葉でつづられていた。朝の会でメールを読み上げると、「先生、インターネットっていいところだね。」「魔法みたい。遠くの人とホームページを通じて、こんなふうにメールがやってくる。」「卒業生も見ているんだ。」と子どもたちは感想をもらしていた。

その後、毎日のようにメールが入ってくるようになった。地域の人、コンピュータエンジニア、教職課程の大学生、社会人のお姉さん、偶然ネットサーフィンしていて訪問してくれた人、他の学校の先生、自分でホームページを開いている高校生、そしてたくさんの同じ年ごろの小学生からも。

さまざまな人からメールをいただき、その一つ一つに返信を書くことにより、子どもたちの世界は広がっていったと思う（資料1）。

（3）わたしたちもメールを出そう

ホームページを検索サーバーに登録すると、新着情報に並んで掲載されている学校があった。「北上市立黒岩小学校5年」。さっそく開いてみると、児童14人のかわいらしい学級の仲間たちのホームページだ。篠岡小5年1組の子どもたちに「こんなホームページ見つけたよ。」と紹介すると、自分たちからもメールを出そうということになった。

学級のみんなを代表して、3人が一緒に相談しながら書いた。

はじめまして、黒岩小学校5年生のみなさん。わたしたちは愛知県小牧市の篠岡小学校の5年1組です。ぐうぜん先生が見つけたインターネットのホームページで、みなさんのことを知りました。篠岡小学校は名古屋市の北東、桃花台ニュータウンの中にある学校ですが、まわりにはたくさん自然が残っていま



●資料1 / 電子メールを書く子どもたち

す。わたしたちも10月からホームページを開きました。見てください。

みなさんのクラスはたった14人ですか。わたしたちは38人です。5年生は3組まであり、全員で118人です。

よかったら、お手紙をください。

数日後、心待ちにしていた返事がやってきた。

篠岡小学校のみなさん、メールありがとうございました。

黒岩は山々に囲まれた、自然豊かな所です。春には運動会、夏には校内水泳大会、田植えがあります。そして、秋には稲刈り、学習発表会があり、冬には学校の山でスキーができます。（日曜日に学習発表会がありました。）さっそくホームページを見ました。ずいぶん人数が多いですね。私たちのホームページも、これからどんどん変えていきます。よかったら見てください。

では、またメールください。

黒岩小学校5年生

その後、子どもたちは、気候や学校の行事、クラスの様子など、自分たちの話題中心にメールを交換し始めた。

次に、世田谷区の松丘小学校の橋本先生からメールがやってきた。

篠岡小学校 5 年 1 組のみなさん、こんにちは。私は東京都世田谷区立松丘小学校 5 年 1 組の担任です。このたびわが 5 年 1 組も、担任のホームページを借りて自分のページを持つに至りました。（中略）一人一人のページを見て、気に入った人がいたら、メールを出してあげてください。みなさんのページはセーブして、学校のパソコンのブラウザで写します。

同じ 5 年 1 組でも、だいが環境が違うでしょうね。今後とも末永くおつきあいできればいいですね。さようなら。

メールとともに松丘小学校 5 年 1 組ホームページを見ると、大人気。特に一人一人のページが気に入ったようだ。コンピュータ室を確保し、メール書きの時間になった。これがきっかけになって、子どもたちの交流が始まった。内容はおしゃべりのようなもので、各人の趣味や関心事からちょっとした話題、歌やタレントの話、少年野球やスポーツのこと

など、大人の側から見ればたわいのないものである。しかし、中にはお互いの夢を語り合っている子もいた。

ホームページとメールをはさんで、子どもたちの世界は広がっていく。子どもたちのメール交換は、小学校卒業後も続いている。

(4) 社会科の学習

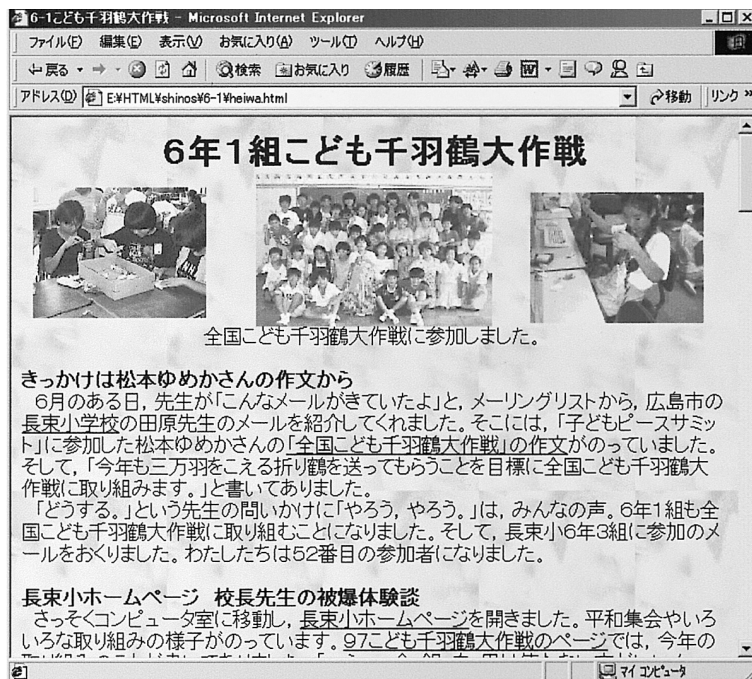
「わたしたちのくらしと国土のようす」

5 年社会科「わたしたちのくらしと国土のようす」で過疎と過密の学習をしていた時のことだ。だれかが「黒岩小と松丘小に聞いて見ようよ。」と言いだした。そこで簡単に質問事項をまとめ、電子メールを出すことになった。質問内容は「1. なぜ人口が多い（少ない）か。2. 住んでいて便利なこと、よいことは。3. 住んでいて困ること、よくないことは。」である。

数日後、岩手県の黒岩小学校の 5 年生から返信が届いた。続いて東京の松丘小学校からも回答が届いた。そこで、2 つのメールを参

考にしながら授業を進めていくと、さらに子どもたちに疑問がわいてくる。特に黒岩小学校については、自分たちの環境と大きく違うのでなおさらだった。

そこで追加質問をすることにした。内容は「1. バスは 1 日に何本ありますか。2. 大都市に住みたいと思いますか。3. 何人家族の人が多ですか。4. お父さんお母さんはどんな仕事をしていますか。」というものだ。やはり数日で回答のメールが届いた。「1 日 3



●資料2 / こども千羽鶴大作戦

本のバス」や「平均6人以上の大家族」などにも驚いたが、それ以上に子どもたちの心を動かしたのは、「大都会に住みたい人」よりも「住みたくない人」のほうが多く、しかもその理由が、しっかりした考えに基づいていたことだった。

子どもたちは、教科書だけでは得られない学習をしたと思う。

(5) 平和の取り組み 「こども千羽鶴大作戦」

「こども千羽鶴大作戦」は広島市長束小学校の呼びかけで、8月

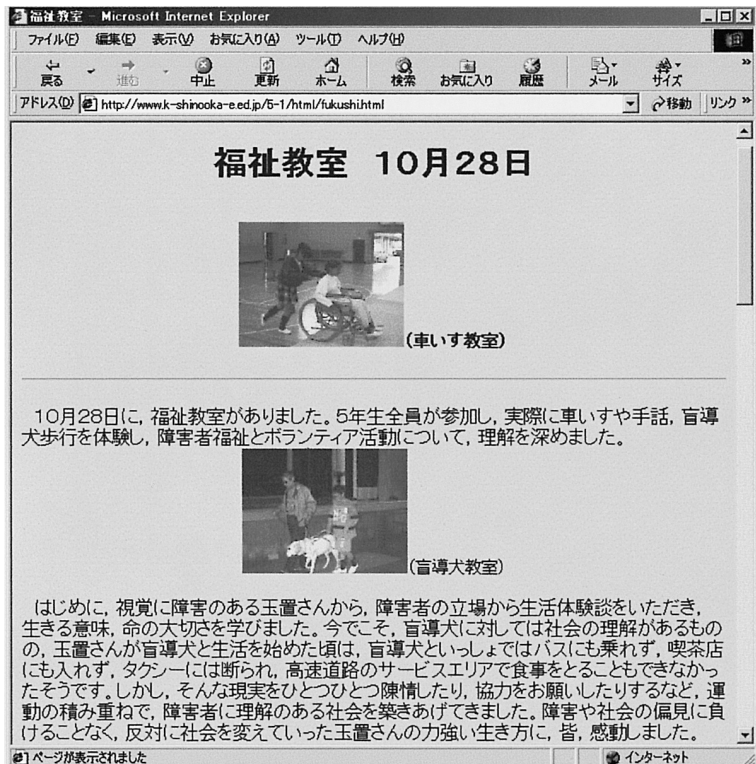
6日を前に、平和の折り鶴を平和記念公園に捧げようというものである。子ども向けのメーリングリストで呼びかけがあり、子どもたちと相談して参加することにした。

この取り組みは児童会にも呼びかけ、篠岡小学校の他の学級にも協力してもらった。「広島島の悲劇」について、長束小学校の校長先生の被爆体験をホームページで学習しながら、集まった三千羽近くの折り鶴に糸を通し、平和集会を行う長束小学校に送った。取り組みの様子はホームページに掲載し、お互いの学校の様子を確かめ合った(資料2)。

3 磯部さんとの交流

(1) 福祉教室とホームページ

5年生の2学期に、社会福祉協議会とボランティアの方で福祉教室が行われた。子どもたちは障害者の方からお話をうかがい、車椅



● 資料3 / 福祉教室ホームページ

子や盲導犬との歩行、手話を体験した。その時の様子を子どもたちの作文を中心に構成して、ホームページに掲載した(資料3)。

ホームページには、いろいろな方から感想の電子メールをいただいた。子どもたちはその一つ一つに返事を書くことにより、自分たちの活動を対象化していった。

(2) 磯部さんからの電子メール

「5年1組ホームページ」が「6年1組ホームページ」になったころ、1通の電子メールがやってきた。

篠岡小学校5の1(今は6の1かな?)の皆さんへ

私は、福島県会津若松市に住んでいる磯部と申します。皆さんのことをある本で拝見し、皆さんのホームページを知ることができました。よく構成されたページだと感心して拝見

しました。

実を申しますと、私は重度の脳性小児麻痺で、一般に言うところの障害者です。皆さんの福祉教室の活動をみて大変感激いたしました。今時の小学生は、こういったことに 관심이薄いのではと感じていたからです。しかし、皆さんの活動を知り、将来への希望がわいてきたような気がしました。これからもその優しさと現実をしっかりと見とれる心を大切に、未来へ向かって強く歩いていってください。いろいろな問題があることと思いますが、一步一步確実に歩いていってください。

突然のメールで申しわけありませんが、もし良かったら、返信お待ちしております。

それでは皆さんのご健闘を心からお祈りし、閉じることにいたします。 磯部 洋

学級でメールを紹介すると、さっそく子どもたちの何人かが返事を書いた。

磯部さんへ

初めまして。私は、篠岡小学校のKです。

私には「脳性小児まひ」というものがどんな症状なのか、どんなに大変かなんて、全然分からないけど、これからもがんばってください。5年生の時の福祉教室をそんなに喜んでくださるとは、思ってもみませんでした。「くるまいす」に乗った時、毎日毎日こういったものに乗ってたいへんだなあとも思ったし、手話をやってみた時も、本当に言いたい気持ちが通じないような気がして、なんだか変な気持ちでした。これからいろいろなことがあると思うけど、本当にガンバッてください。さようなら。

すぐに、磯部さんから返信が届いた。

返信メールありがとうございました。

Rさん、Kさん、私たち身体に障害を持っている人たちの中にも、いろいろな考え方があるのですよ。私の個人的な意見ですが、障害というものはその人の個性だと考えていま

す。ですから、RさんやKさんがもし眼鏡をかけているとしたら、その視力が弱くて眼鏡をかけるのと同じようなものではないかと思っています。

まだ障害というものが、個性として理解されないだけなのかもしれませんね。

Rさん、Kさんに、一つ良いことをお教えしましょうか。

もし街で障害を持った人がいたら、手を差し伸べる前に声をかけてあげてください。障害を持っている人でも、自分でできることはその方にやらせてあげて、どうしてもできないところをお手伝いさせていただくことが、本当のボランティアだと私は感じます。

上記の文章を読んでおかしいと感じませんか？

「...をさせていただく。」この意味をよく考えていただきたいと思います。もしよかったら、6の1の皆さんで考えてみてはいかがでしょうか。

よろしければ6の1の皆さんの考えをメールで送ってください。 磯部 洋より

(3)みんなで考えよう

磯部さんのメールについて、学級の子どもたち全員で話し合うことにした。

はじめに、街で「障害者」に出会った時に、どんなふうに思ったかについて質問した。しかし、なかなか意見がでてこない。「遠慮なく、思っているとおり発表してごらん。」と促すと「大変そう。」「かわいそう。」「ちょっと変な感じがした。」「少しこわかった。」などの意見が出た。そこで、福祉教室の講演の言葉を引用した。「私たちは不便だけど、不幸ではないのです。」この言葉はどういう意味なのだろうか、ということから話し合いを始め、「...をさせていただく。」について考えさせた。

子どもたちからは、「かわいそうだから...してあげる、という考えは間違っている。それはいばった考え方だ。」「同情が必要ではな

くて、対等の立場で接することなんだ。」「健康者も障害者も同じ人間。」「障害者は特別な人ではなく、普通の人として、一緒に町で生活していくことじゃないかな。」などの意見が出された。

「障害」を「個性」と考えることは、最初は子どもたちにとって驚きであったが、一人一人の得意・不得意や好み、背の大きさや髪の色など、個性を取り上げていくうちに、自分なりに理解していった。話し合いの後、子どもたちは、各自の考えや感想を磯部さんへのメールにした。

磯部さん、はじめまして、こんにちは。

わたしは「...をさせていただく。」の意味について、こう思います。たぶんだけれど、「...をしてあげよう。」という考えでは、まるで自分がいちばんえらくて、その人を下として見ているみたいで、おたがいに気まづくなるからじゃないかな？ だってこれでは、全くの差別であると思う。こういう時、人間はみんな同じ、おたがいに困っている時はあるのだから、そういう時、もしできることがあればやらせてもらおう、という気持ちでやらせてもらわなければいけない。...そんなことだと思う。

少しへんかもしれないけれど、自分なりに考えました。それではまたメールを書きます。さようなら。(S)

私たちは「...をさせていただく。」の意味を、6年1組みんなで話し合いました。最終的には、「障害者のお手伝いをさせていただく。」「普通はできないボランティアをさせていただく。」という意味になりましたが...。どうでしょうか？

私は、障害者の人を見ると、個性だとは思えません。絶対「かわいそう。」って思ってしまうんです。だから、1日でも早く「健康者と同じ。」と思えるようにしたいです。(K)

磯部さんからは子どもたちのメールに対し、

一人一人に丁寧な返信をいただいた。

(4) 電子メールでの交流は続く

これをきっかけに、子どもたちは磯部さんに学校や生活の出来事や悩みをメールにつづって送り、返信をもらおうといったことを繰り返していった。

ある日、Mが「修学旅行すっごく楽しかったよ!」と送ると、磯部さんからは「私も旅は好きなので、そのうちゆっくりと京都を旅してみようかと思っています。でも、障害を持っていると普通の人のようにはいかないところがたくさんあり、本当に困ってしまいます。最近は設備もいろいろな面で改善されているとはいえ、まだまだ私たちが自由に旅行できる状態ではありません。このことは後でまたゆっくりとお話ししましょうね。」と返信が届いた。

それに対してMは「ところで、話は修学旅行に戻るけど、磯部さん、障害のこととか気にしてるの？ 映画村なんか障害者いっぱいみえたよ! その障害者の人とかも楽しそうにしてたし、周りの人も楽しそうにしてたし。私もずーっと前までは、ちょっぴりこわいな、とか思ってたけど、今は、ぜーんぜん平気! 障害者の人とも結構普通に接することができるようになったし。きっと、みんなそう思ってるよ! だから磯部さん、障害なんて感じてないで! ネッ!」と返していた。子どもたちの心の成長には驚かされた。

(5) 卒業を前に「生きる」を考える

磯部さんから「私は最近『生命(いのち)』とは何か、『生かされてる』とはどういうことを自分自身に問いかけています。もし、よければこの課題を6の1で話してみたいかがですか。」というメールをいただいた。卒業直前に小学校生活のまとめの授業として、取り組むことにした。

事前に磯部さんをお願いして、磯部さん自

身の生い立ち記を書いていただいた。授業は至ってシンプルな展開で、生い立ち記を「磯部さんの手紙」として音読し、子どもたちに手紙について感想や思ったことを書いてもらい、それを発表しながら話し合いを進めた。次に「生きる」について「自分の考えを磯部さんへの手紙にしよう。」という形で、子どもたちに考えをまとめさせた。

電子メールで届いた生い立ち記は、原稿用紙15枚にも渡るものだった。子どもたちは、その中から、磯部さんが自分を振り返るために養護施設（療護園）を訪問したことや、自分よりさらに重い障害を持った人々のためにボランティア活動に打ち込んでいることなどに、感銘を受けたようだ。それぞれ自分なりの考えをまとめ、メールにして送ることにより、最後の授業を終えた。

「生きている」ということは、「生かされている」「守られている」ということと、磯部さんは教えてくれました。じっくり考えてみると、本当に、母、父、親せき、友だち、先生、まだまだたくさんの人に、私も守られている！ だから、私の話や相談や意見を端から端まで聞いてくれたり、怒ってくれたり、一緒に笑ってくれたり、泣いてくれたり、感謝しないといけないことがたくさんある。私も悩んだり、困ったり、いろいろあるけれど、これは、私も生かせてもらっている証拠だと思う。

もっといろいろなことを勉強して、自分にしかできない大切なものを見つけて、使命を果たしたい（果たさなければならぬ）。そのために、今私は、小学生という階段を1段だけ上がれた気がする。その先がとっても楽しみです。とてもいい勉強をさせていただきました。（N）

私はなぜ生きているのか？ と思います。それは、私が生きていて何の意味があるのかと、時々思うからです。けれど磯部さんからいただいたメールで、私でも何かをしなけれ

ばならないと思えてきました。今度は中学生です。大人になるにつれて、私のやらなければならないことを見つけていきたいと思います。（H）

（6）その後のこと

2年後、職員室に中学の制服を着た訪問者があった。6年1組の卒業生である。「磯部さんにメールを書きたい。」という。理由を聞くと、「授業で障害者福祉の討論をしていて、疑問点があり、直接質問したい。」とのことだった。さっそく磯部さんと中学の担任の先生に連絡を取った。

中学校の2年C組では、学級で話し合ったことを電子メールで磯部さんに送り、意見の交換を行った。インターネット環境が家庭に普及するにつれ、自宅から直接電子メールで交流する子どもたちも現れ始めた。

（7）そして、初めての再会

磯部さんが小牧市を訪れることになった。午前中の篠岡小学校に引き続き、午後は篠岡中学校である。ここで、子どもたちと磯部さんは「初めての再会」を果たした（資料4）。

学年集会では、磯部さんの紹介の後、磯部さんから実際に車椅子を使ったり、目隠しをしたりして障害者補助の方法を学び、質疑を行った。あらかじめ中学の先生よりお願いされていた「障害を持って困ったこと」というテーマに対し、「障害を持って困ったことはありません。ただ、ちょっと不便だったり、時間がかかったりするだけです。」「障害者を見かけたら、手を出す前に、声をかけてください。そして、本当に必要なことだけ、手伝ってください。」と語ったことが、子どもたちの心に残ったようだ。

子どもたちと磯部さんのメールでの交流は、今でも続いている。そして中学3年生となった子どもたちは、今年の2回目の再会を心待ちにしている。



●資料4 / 「初めての再会」篠岡中学校にて

4 おわりに

インターネットを情報メディアとして活用することにより、ホームページと電子メールを通して、双方向の交流が生まれる。インターネットの上では教室の壁は取り払われ、世界に広がっていく。同年齢の子どもたちだけではなく、年齢も立場も違う多数の人々との交流は、子どもたちに直接社会とかかわり合うという貴重な体験を与えてくれた。

磯部さんをはじめとしたさまざまな人々や小学生とネットワーク上で出会い、交流を続けたり共同で学習したりすることにより、子どもたちは積極的に課題に取り組み、理解を深めることができた。学びの質は、従来とは比較にならないほど豊かになった。

「篠岡小学校 5 年 1 組ホームページ」は「6 年 1 組ホームページ」を経て、現在は「しのっこの広場 篠岡小学校ホームページ」として情報発信を行っている。情報メディアのメリットを全校児童で共有し、今後も活用していきたいと思う。